

僕は小学一年生のころから募金をしていた。しかしそのころの僕はなぜ募金するのだろうと疑問に思っていた。

小学二年生へ進級した。募金をする理由はまだわからないままお金を送り続けていた。そのうち、なんとなくだが見えるようになってきたのだ。募金という物の大切さと重用性だ。ある日の夜調べてわかった。十円には二〜六じょうの薬に交かんできることが分かった。しかも一じょうで一〜二リットルの水をきれいにするなんて思いもしなかった。そう考えると、百円では二十〜六十じょう、千円では二百〜六百じょうと計算を続けた。いよいよ今日は募金する日。僕は昨日の夜の事を思い出しながら思いを込めて募金箱の中へお金を入れた。いつもなら重たいランドセルとを感じるものが今日はいつもより軽い気がした。次の日も、その次の日も、この事を思い出したたびに体が自然とはずむようになり、もっと募金がしたいなんてついつい思ってしまう。僕は店のあちこちで募金を続けた。

六年生を卒業して、ランドセルを送った。僕にとってランドセルは六年間の宝物だ。家の人から「もう六年間たったし捨てれば。」と言われた。しかし僕は抵抗していた。「何で捨てないの。」と、きかれたが、僕はこう答えた。「ランドセルはぼくの六年間で一番の宝物なので宝物を捨てるわけにはいかない。」といった。ある日のことネットで「ランドセル」と調べた。色とりどりのランドセル。カッコイイ、かわいいなどのランドセルがあった。その中でも一番目にとまったのは、海外の子供へ、いらなくなったランドセルを送るサイトだった。クリックして見たら「送りたい」という気持ちになったが、送るには千二百円ほどかかるそうだ。家の人に相談したら「いいよ」と言ってくれた。そして「ノートやえん筆や消しゴムなどを入れたら、もっと相手喜ぶんじゃない。」と言ってくれた。僕はさっそく準備をした。中にはノート五冊、えん筆二ダース、消しゴム十個と自分で書いた手紙を入れた。手紙はすべて英語で書いた。内容は、「僕の名前は林宇凡です。好きな食べ物はすいかです。ノートなどたくさん入れたので頑張ってお勉強してね。大切に使ってね」と書いた。送ってから二ヶ月後に手紙が送られてきた。僕はドキドキしながら手紙を開けた。内容は「ありがとう林くん。林くんのおかげで楽しく学校生活しているよ」という、うれしい言葉が書かれていた。手紙を見ているうちに自然と涙があふれてきた。そしてこの手紙は僕にとって第二の宝になった。

ランドセルや募金でこれだけのいい事をしたならそれと同じくらいのいいことが返ってきた。これからも貧しい人のために、できることを全部していきたいと思った。